

## 第6回団体交流会 グループワーク交流記録

記録 木下

項目	内容
時間	平成27年9月12日 15時～15時45分
打合せメンバー	コーディネータ 木下 記録 岡本 発表 岡本 メンバー 参加者10人
グループワーク の状況	<p>メンバーの自己紹介と所属団体の活動紹介と引き続き、所属団体の活動で、困っていることやうまくいっている内容について発表することとした。 また高林副市長の講演内容に関する意見についても意見を求めたが特に発言はなかった。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 富田林在住で和楽演奏活動を屋ているが、泉佐野や堺など近隣の市から声がかかり交流していたが、大阪狭山市では初めてであり参加できてよかった。(永田)</li> <li>2) 会員37名で、施設入居者を訪ねひたすら聴くことに徹している。次の世代探しはうまくいっている。公益支援金は用途が限定され使いにくく途中で申請をやめた。(東尾)</li> <li>3) 個人的には文化活動に参加しているが団体としては、サロンに絵や写真を展示するなどまちづくりが主体で文化活動は限られる。(林)</li> <li>4) 文化協会はいろいろな文化の内容を子供たちに伝えたいとの思いで活動を続けている。会員200年。 舞踏協会は20周年になるが、参加者が少ないのが悩み。 狭山音頭保存会の活動で復活し始めた。(青森)</li> <li>5) コンベンションホールでの年1回の例会は盛況だが高齢化が悩み。(神野)</li> <li>6) 会員100名で堺市からも参加。焼くのは手間がかかりお金もかかるので大変だが、子供たちも興味を持ち、自分で作ったものには愛着がわく。(山本)</li> <li>7) 人を集め、子育てを主眼において活動している。(宮本)</li> <li>8) 紙芝居は子供たちとの対話の手段として活動している。(平野)</li> <li>9) 水彩画のクラブで現在14人の会員で活動している。 最大17人程度で個人的には現状維持がしんどい。(大沼)</li> </ol>



第6回団体交流会（文化芸術）グループワークまとめ

開催日	平成27年9月12日（土）14:50～15:40 南館講堂
GW① 参加者名	①山本（陶芸協会）②近藤（文化協会）③松尾（文化協会）④永井（傾聴さやま） ⑤塚田（混声合唱）⑥川竹（合唱連盟）⑦小川（美術協会）⑧前田（和音くらぶ） ⑨植田（洋画研究） ファシリテーター：中西、記録：日野
進行内容	①各団体別に活動内容を紹介する（各2分程度内で） ②A: “ <u>団体が抱える課題・悩み等について意見交換</u> ” <ul style="list-style-type: none"> <li>・会員の高齢化が進み、平均年齢70歳代となっている状況である。</li> <li>・経費維持に苦労している。市民向けに発表会、展示会を開催するが、限度がある。これから市のビジョンが達成できるよう積極的な支援体制の旗振りをおこなってほしい。</li> <li>・練習、稽古での会場確保に苦労している。 市の主催等を行う場合、会場が優先的に押さえられている。市民活動団体の優先的な措置が必要である。</li> <li>・観客増員のPR、誘致に苦労している。</li> <li>・若者の誘致に苦労している。</li> <li>・指導者育成が必要である。（若い指導者も含む）</li> <li>・文化事業団の活動がよく見えない、もっと広報が必要である。</li> </ul> B: <u>解決策・アドバイスについて</u> <ul style="list-style-type: none"> <li>・観客増員については、あらゆる角度から内部で検証し、積極的なPRと関係するところと連携を持つことが必要である。それには10年の期間が必要である。それまでの取り組みで諦めることなく、努力をすることである。</li> <li>・美術関係では大人だけではなく、こどもを対象に展示会を開催している。 今は、教育委員会や学校現場の教員や保護者等の協力ができているが、最初は自分らの手で学校に行き、展示品を運ぶことからすべてを行っていた。 時間をかけて理解を得ることで、お互いの信頼をつくることができ、今にある。 展示会を1週間開催するが、今では観客数は8000人を超える規模となっている。</li> <li>・経費については、補助金のあるものは率先して応募し、積極的にとりにいく。 金額的に大小をつけずに、なんでも受け取るぐらいの気持ちを持つことである。</li> </ul>
感想	今日、お集まりいただいた一部の団体でも合唱、美術、陶芸、舞踊等がある。「しみんのちから」に登録されている団体にはダンス、落語、演劇（こども・若者含む）等があり、もっと“こどもから高齢者まで”観賞事業が充分浸透しているかと考えたとき、不十分と言わざるを得ない。これから2025年にむけての取り組みの一環として、「文化（食、スポーツ含む）・芸術」をもっと前面に出せる仕組みづくりが必要であり、活動内容が違って、お互い連携しながら、活動すれば、「住みやすい、暮らしやすいまちづくり」に繋がるのではないかと感じた。